

岸 美咲

1. 事業実施の目的

博士論文執筆のための現地調査

2. 実施場所

インドネシア中部ジャワ州スラカルタ市とその周辺都市

3. 実施期日

2025 年 8 月 5 日 (火) ～ 2025 年 9 月 30 日 (火)

4. 成果報告

●事業の概要

博士論文執筆のため、2025年8月5日～9月30日にインドネシアへ出張し、中部ジャワ州スラカルタ市を拠点に現地調査を行った。現地では主に、インタビュー調査、ダランの実技の習得、文献調査、そして上演の参与観察を行った。中部ジャワの影絵人形芝居ワヤン・クリ *wayang kulit* (以下、ワヤン) では、多くの研究書や、一般の観客たちからは、人形遣いダラン *dalang* は男性が担い手であり、多くが芸能の家系の出身者であるとみなされてきた。もっとも、このような見方は、家系や性別役割を重視する社会的価値観に基づいたものである。実際には女性ダランが少数ながら継続的に存在してきた事実を覆い隠してきた側面もある。しかし、伝統芸能の教育制度やインターネットの発達などのメディアの変化を背景に、女性ダランの活動が可視化されつつあり、注目を集める女性ダランも出現している。本研究では、ニ・ルミヤティ・アンジャンマス Nyi Rumiya ti Anjangmas (1946-)、ニ・クニ・アスモロワティ Nyi Kenik Asmorowati (1980-)、ニ・エリシャ・オルチャルス・アラッソ Ni Elisha Orcarus Allasso (1993-) という、世代の異なる3名の女性ダランを取り上げる。本研究の目的は、これら3名の女性ダランの活動の実態を調査し、女性ダランを取り巻く状況がなぜ、どのように変化し、女性ダランの活躍が可能となりつつあるのかを明らかにすることである。加えて、上演の演出や表現の特徴、観客やスポンサー（上演を経済的に支援する依頼主）による彼女たちの受容のあり方を考察することで、現代ジャワ社会における女性芸能者の位置づけやその変容を明らかにすることを目指す。

これまでの調査では、女性ダランの修行の過程や彼女らに影響を与えた人々、さらには彼女らの上演が作られる過程について明らかにした。それにより、まず、家族などの上演を見て経験的に学ぶという伝統的な修行の方法に加え、1960年代以降の国立の芸術大学や、1990年代以降の、ワヤンを市民に伝承するサンガル *sanggar* (芸能の稽古場・上演の拠点) などの新しい教育システムの出現によって、修行の方法やダランの出自が多様化したこと、そして、大学などを中心とした家族とは別の新しいコミュニティが、現代のダランにとって重要度を増していることが明らかになった。さらに、従来は上演中、ダランが上演の型に基づいて舞台上で即興的に語りや音楽を決定していたのに対し、近年、あらかじめ台本を制作することや、台本制作や音楽のアレンジを、外部の作家に依頼し、共同制作の形で上演を行っていること、そのことが、女性がワヤンを上演することの障壁を低くしていることが明らかになった。また、彼女たちが上演の中で、女性キャラクターの登場場面や発言を際立たせる演出を行っていることも明らかになった。

一方で、観客やスポンサーによる支援の構造および彼らによる女性ダランへの評価や期待、詳細な女性キャラクターの表現の実態は十分に検討できなかった。そこで本調査では、この2点を重点的に調査することを計画した。具体的には、(1)女性ダランの上演を支援する観客やスポンサーが何を期待し、どのような点を評価しているかを明らかにすること(2)女性ダランの上演における女性キャラクターの表現を分析し、彼女たちが「女性であること」をどのように作品に反映させ、社会に発信しているかを考察することに焦点を当てた。

今回の調査では、3名の女性ダランに取材するとともに、前回まで時間の都合で取材できなかった、女性ダランと関係の深い男性ダランやファンへのインタビューを行った。取材を進める中で、現代のワヤンの鑑賞方法や、観客同士および、観客とダランの関係において、ソーシャルメディアが重要な役割を果たしていることが浮かび上がってきた。また、対象となった男性ダランの中にはサンガルを組織し、市民に芸能を教えている者がいたため、サンガルについても詳しく調査し、これまでのダランの修行過程に関する情報を補足した。ソーシャルメディアやサンガルでの活動は、女性ダランの可視化や、ダランの新しい教育の場として重要であり、上記2点に関連して位置づけることにした。

その結果、調査では以下の3点について成果を得ることができた。具体的には、(1)ソーシャルメディアの浸透に伴うワヤンの変化および演者と観客の関係性、(2)サンガルにおける教育活動、(3)女性ダランの上演における工夫である。本調査は、上記の目的に基づき、以下の方法で行なった。

▶**インタビュー調査**：女性ダラン3名に計8回、観客・スポンサー・男性ダラン10名に対して聞き取りを行った。これまでの内容の補足・確認を行うとともに、オンライン配信の影響、観客の期待、サンガルにおける教育、上演における工夫などについて取材した。ニ・ルミヤティのインタビューの内容はアシスタントが逐語録を作成した。

▶**参与観察**：3名の女性ダランおよびその他数名の男性ダランによる上演や演奏会に同行し、演出上の工夫や観客との相互作用を記録した。報告者自身も一部上演で演奏者として参加した。

▶**ダランの実技の習得**：ニ・ルミヤティの姪であるニ・ニア・ドウィ・ラハルジョNyi Nia Dwi Raharjoおよびニ・ルミヤティ本人から指導を受け、《ジャイエングロノ・アダニンガルJayengrana Adaninggar》という作品の一部を学んだ。語りや声の使い分け、人形操作、キャラクターの表現方法などを通して、ニ・ルミヤティの上演における細やかな工夫を具体的に理解することができた。

▶**文献・資料調査**：インドネシア国立芸術大学スラカルタ校の附属図書館でルワタンの資料や楽譜を収集、今後の分析の基礎資料とした。

▶**3名の女性ダランの過去の上演のトランスクリプト作成、そのインドネシア語訳**：2名のアシスタントに依頼した。今後、詳細な分析を進める。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の調査は、前回の調査で明らかになった課題に基づき、観客・スポンサーの評価と女性キャラクターの表現という2点を調査し、成果を(1)ソーシャルメディアの浸透とワヤンの変化および演者と観客の関係性、(2)サンガルにおける教育活動、(3)上演における工夫の3つの視点から整理した。

1. ソーシャルメディアの浸透と演者・観客の関係

まず、新型コロナウイルス流行以降、YouTube、Instagram、TikTokなどのインターネット上のソーシャルメディアを活用して、ワヤンを発信するダランが増加していることが明らかとなった。多くのダランは時代の変化に柔軟に対応する必要性を認識し、上演や日常の様子を積極的にオンラインで発信している。一定の知名度を持つダランの中には、楽団員とは別にライブストリーミングや音響の

専任チームを持ち、機材も自分で所有する事例がみられた。これにより、TikTokなどを通じて若年層を中心とした新たな観客層を獲得しており、ファンへの聞き取りでもインターネットでの視聴が重要な鑑賞の手段となっていることが確認された。とりわけ、今回インタビューした、家系出身ではない高校生の男性ダランのキ・ユスフ・アンショル Ki Yusuf Anshor が、YouTubeの映像の視聴とその模倣を通じてワヤンを学び、その後で師匠に弟子入りしてワヤンを学んだ事例は、映像が学習経路として機能し始めていることを示している。

ニ・エリシャのファンの多くは、彼女の容姿や女性歌手シンデンとしての魅力をきっかけに、彼女のダランとしての上演を視聴している。それを通して、結果として初めて女性ダランの上演に触れるケースも多い。彼女のファンは「ダランは男性である」という従来の固定観念に挑戦する姿勢を評価しており、女性であることが彼女の強みとなっていることがうかがえる。またファンが彼女の上演の補助を担う例も確認され、演者と観客の距離がソーシャルメディアを通じて縮まっていることが明らかとなった。一方でニ・ルミヤティは長年シンデンとして活動してきたが、その経歴自体がダラン活動に直接影響したわけではなく、むしろ経験や精神修養、そして他のダランとの信頼関係の構築が上演機会の確保につながっていると述べた。ニ・クニの場合、父親や兄たちが当初から「女性であることは強みになる」ととらえて積極的に支援しており、実際に複数のスポンサーが「女性ダランの上演を見てみたい」という理由から上演を依頼していることも確認された。

2. サンガルにおける教育活動

今回の調査では、サンガルの役割についても知見が得られた。今回インタビューした男性ダランの中にはサンガルを運営する者もあり、サンガルは、個人または家族による私的な芸能スタジオとして、市民に芸能を伝承する場となっている。スラカルタ市のサンガル・サロトモ *Sanggar Sarotama*、スコハルジョ県のサンガル・パマルト *Sanggar Pamarta*、ジョグジャカルタ特別州のサンガル・クチュブン・サクティ *Sanggar Kecubung Sakti* を訪問したところ、主に小学生を中心とした子どもたちがワヤンを学んでいることが確認された。サンガルでは人形操作、台本の読み方、歌、合図などが個人または10人程度の小集団で指導されており、カリキュラムは生徒の習熟度に応じて柔軟に決定される。上演は、通常上演される一晩の形式ではなく、競技会向けの短い構成で学ぶことが多い。近年はYouTubeなどをきっかけに、家系に属さない子どもがワヤンに興味を持ち、サンガルで学ぶケースが増えていることや、女性ダランの育成に力を入れるサンガルの存在も確認されたことから、サンガルが新たな修行の場として機能していると考えられる。

3. 女性ダランの上演における工夫

さらに、女性ダランの上演における工夫については三者三様であるが、共通して女性の活躍を打ち出す演出と、場の状況に応じて柔軟に上演構成を変化させる姿勢が確認された。

▶ニ・ルミヤティ：儀礼のワヤンであるルワタンにおいて、妻が夫に不公平を訴えるシーンを挿入するなど、女性の権利を主張する語りを取り入れた。彼女は語りを重視した上演を行っている。加えて、彼女やニ・ニアによる実技レッスンを通して、人形操作や台詞のイントネーション、キャラクターごとの表現の差異を丁寧に表現していることや、女性らしい声の表現を大事にしながらも、女性歌手シンデンの発声とは異なる、ダランとしての力強い発声を両立させていることも確認された。

▶ニ・クニ：女性や道化のキャラクターを通じて、女性も男性と同様にリーダーになりうることや、男性も女性と同様に子育てを行う重要性を打ち出している。同一の演目を6時間版と1.5時間版で上演しているが、時間や流れに応じて場面構成を調整した。台本に基づきつつ、観客の反応に応じて即興

的に対応している。音楽面でも音階や旋法の特徴を踏まえた楽曲選択やアレンジャーとの調整により、ドラマ性を高めようとしている。

・ニ・エリシャ：これまでの調査で、あらかじめ詳細な台本を準備していることが分かっていた。以前はある男性ダランに台本を依頼していたが、今回、2025年8月19日の上演では大学時代の友人に初めて台本を依頼し、演出の幅を広げていた。彼女はこれまでに女性が主人公となる上演を多数上演してきた。そのほか、時事問題や現代的ユーモアを積極的に取り入れ、観客を楽しませることを重要視している。インタビューは完全即興で進行し、楽団員との掛け合いや子ども向けのクイズなど、観客を巻き込む工夫が特徴である。

以上より、今回の調査では、(1)ソーシャルメディアの浸透と演者と観客の関係の変化、(2)サンガルにおける教育、(3)女性ダランの上演における工夫の3点において新たな知見を得ることができた。これらの成果は博士論文の分析に直接組み込む予定であり、今後はソーシャルメディアの浸透によるワヤンの観賞体験の変化、ダランの修行の過程の変容などをテーマとした投稿論文としての公表も視野に入れている。

●本事業について

本事業のご支援により、昨年の調査に続いて、現地での継続的な調査を進めることができ、研究を大きく前進させる貴重な機会となりました。特に、渡航を伴うフィールドワークは他では代替できず、対面での調査により得られた成果は非常に大きいものであると考えています。現在、航空券代の高騰などにより、海外調査の機会を得ることは年々困難になっています。そのような状況の中で、本事業の存在は海外をフィールドとする学生にとって大きな支えとなっており、今後もぜひ継続していただければ幸いです。



ニ・ルミヤティ(右奥)とニ・ニアによるダランの実技のレッスン (2025年9月、筆者撮影)。



ニ・クニへのインタビュー（2025年9月、バゴン氏撮影）。



ニ・エリシャによるワヤン上演（2025年8月、筆者撮影）。